Vol.04 2016/09/14
le bois d'hanyu

特定非営利活動法人　羽生の杜

私も羽生の杜を応援しています！②

東京からこちらに遊びに来るようになって、２年目の夏です。40 年来の知人、タムちゃん(田村事務局長)を最初に訪ねてきたのは 2014 年の冬を過ぎた頃だったか。

早春には、みどりさんが飾った白いヒメツバキが迎えてくれて、春は黄色いレンギョウが咲き、大きなミカンが垂れ下がり、夏はスギちゃんが手をかけた野菜畑に初々しく実がなり、秋はイソちゃん主導の落ち葉焚きで、地元の子どもたちと焼き芋をホクホクほおばり、どこか私には別天地になっています。

その新鮮さは、36 年前の私を思い出させます。

1980 年、私は日本で初めてのパズルマガジン、「パズル通信ニコリ」を創刊しました。門外漢の私はなにもかも見様見真似でつくり、売りに歩けばほとんどの書店で断られました。モノが稚拙だったからです。マーケティングもリサーチも一切していなかった。

しかし雑誌を生んでしまったから仕方がない。転がるしかない。あるのは変な自信だけ。

それを後押ししてくれたのがタムちゃんと奥さんの靖子さんでした。タムちゃんには夜の世界で会社のあり方、リーダーシップのあり方（帝王学）を学び、靖子さんには昼の世界で版下づくり、雑誌の作り方を学び、いま思えば「ゼロから１」になりました。

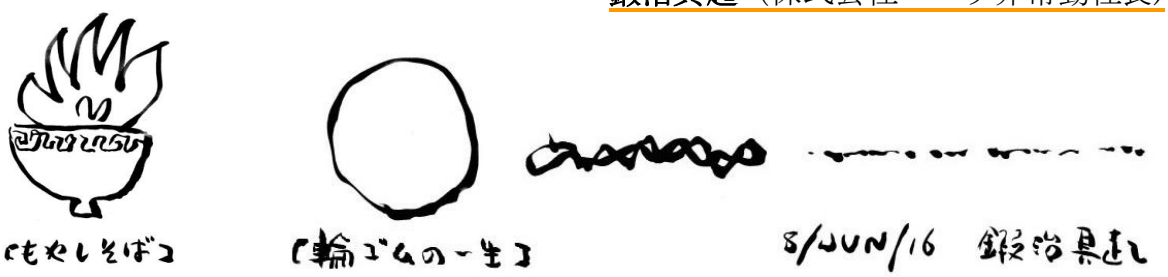
１になればあとはカンタン。２，３，４と転がっていきました。

そんな黎明期をいまの羽生の杜に感じます。ピッカピカでがむしゃらなカンジ。いいなあ、と。私が長く忘れていたわくわく感がここにはあります。素朴で壮大な野心は、まず小さなことから始めること、１ミリの違いを擦り合わせることから始めること。

一緒に笑いたいとか、一緒に泣きたいとか、一緒に本質を知りたいとか、の発信はいつかこの杜を飛び出して、波紋のように広がり、海を渡っていくかもしれません。手前味噌ですが「ＳＵＤＯＫＵ」のように。そうなったら面白い。

ようこそ「羽生の杜」へ。「ようこそ羽生の海」へ、ですよ。いまは池しかありませんが。これがサイコー。

鍛治真起（株式会社ニコリ非常勤社長）



羽生の杜は いま

１、まずは地域の方々に「知られる」こと

2015 年 4 月からフルメンバーが羽生に住みつき活動を開始して 1 年 5 か月を過ぎようとしています。多くの方々の多様な支援によってさまざまな行事を継続的に行うことができました。おかげでこの地における認知度を上げるという一番の目的を確実に果たしつつあります。

1－1 ．

オープニングコンサートを手始めに立川志らべさんの落語会（2016 年 3 月）や 2 度目のジャズコンサート（2016 年 6 月）などですが、このコンサートには近隣から 70 名を超える方々が集まり会場に入りきれない方々が外での立ち聞き状態になり嬉しい悲鳴を上げました。

またオープニングに先駆けての昨年 7，8 月の夏休みには「おいでよ！はにゅうの森」を企画し延べ 60 人以上の子どもたちが集って勉強や遊びを通してここを知っていただくことができました。この企画は引き続き冬休みにも実施し多くの子どもたちに「羽生の杜」が知られるよい機会になったのではないかと思ってます。

そして今年も 7 月 29 日を皮切りに 6 日間の夏休み企画を実施しました。今年は離れの 2 階屋を整えて午前中の座学は 2 階屋の一階で行い、午後からは森で遊ぶなど夏の定番プログラムになりつつあります。今年の「おいでよ！」企画の特筆すべきこととして近隣の方々やデイ・サービス（「羽生こみゅこみゅ」）に来てくださっている方々の協力によって支えられたことです。詳細は伊早坂さんからの報告をご覧ください。

1－2 ．

「羽生の杜」を知っていただくうえでホームページが果たす役割は決して過少に評価することはできません。まめにコンテンツを更新していくことでページビューのアカウントを上げていくことになりますが、わがホームページは伊早坂さんのタイムリーな情報発信によって認知度促進を大いに高めているものと確信してます。どうぞ時々「羽生の杜」をのぞき込んでみてください。そして離れている皆さんにとっても身近な存在として認知いただければ幸いです。

1－3.

森の整備については山ほどある作業を確実に積み重ねてくることができました。この作業はお二人のボランティア・スタッフが昨年の 10 月以来毎週休むことなくほぼ 2 日間以上を割いて関わってくださり目を見張るような変化を遂げつつあります。「羽生の杜」にとってこの森は貴重な財産ですが手を加えることによってますます快適な空間を近隣

の方々に提供できる癒しの場に仕上げていきたいと考えてます。2頭の山羊たちは子どもたちにとっていい遊び相手でもあるようです。森のなかにある池は配水管を繋げて水質を浄化し遊べる水場にします。さらに森のなかは芝生とクローバーを敷き詰め、花畑や果樹園など整えて遊歩道としても整備して高齢者や子どもたちや近隣の方々が安心して森を満喫できるスペースを目指しております。結果、地域における認知度を高めることになるものと確信してます。

1－4.

行政とのパイプを強化し商工会との繋がりも大切にしながらこの地におけるプレゼンスを高める努力をしてきましたがまだまだ十分とは言えません。また羽生市のケア・マネージャーの会例会に出席することなどを通して地域のニーズや福祉の課題を学ぶ機会にできる限り参加して地域の課題の共有化を図る努力も怠らないようにしていきたいと心がけております。

２、今年度の課題（目標）

①子どもたちの居場所づくり

この件については中心的に担っている伊早坂さんの報告をお読みください。

②高齢者の居場所づくり

②－1.

NPO 法人「羽生の杜」の当初の目的は①の「子どもたちの居場所づくり」と②の「高齢者の居場所づくり」が主なる課題でした。この一年間は②については目立った進展はありませんでした。デイ・サービスの「羽生こみゅこみゅ」は昨年 10 月のオープン以来週に 3 日間行ってきましたがレギュラー的にいらしてくださる方は 3～4 名でその内容の多くは「おしゃべり（会話)」が中心でした。お一人だけ「囲碁」を打つ方が継続して来ておられますが、わが仲間の丹波さんが相手をして都内から月/２回講師として来てくれています。いくつかのメニューを用意していたのですが、この囲碁だけが継続していてそれ以外は何も出来てません。

②－2.

羽生市は人口５万５千程度ですが「デイ・サービス」は市内に１５か所あり、人口比でいうとかなり多い市といえます。

ここ「羽生の杜」にいらっしゃる方々は皆元気で何かのサービスを受けたいという対象者は皆無です。高齢者といっても一括りでないことは言うまでもないのですが改めて多様な受け皿があり得るということに気づきました。

今年度中に高齢者を受け入れる継続的な活動を立案し着手したいと準備中です。

②－3.

具体的なビジョンはこれからです。高齢者の終の棲家の企画・実施を長年にわたって実績のある株式会社コミュニティーネットさんに協力していただきながら、また地域のニーズを把握するうえで行政や社協やケアマネの会などともしっかり話し合いを重ねていくなかで最も必要とされている「コト」と「モノ」を追及したいと考えてます。

②－4.

高齢者の居場所はいろいろなアイテムがありますが、私としては元気なお年寄りがそれまで蓄えてきた知恵やノウハウ（スキル）を提供していただける場つくりを目指したいと思ってます。この森という立地を生かして大人も若者も子どもも自由に集い、楽しい居場所作りができればまずは初期の目的を達成できたと言えるのではないかと思ってます。「オモイ」が「カタチ」になるまでもう少しの時間をいただくことになりますが、引き続きご支援のほどお願い申し上げます。

②－5.

2025 年には団塊の世代の全員が 75 歳を超えることになり、まさに高齢化社会に突入します。残念なことに日本の社会保障制度や社会のシステムがそれまでにしっかりとしたセイフティーネットで対応できるかどうか非常に心もとない状況下にあります。

私は 1998 年の夏に数人の仲間たちとスウェーデンの福祉に学び触れたいと思い失明していた妻も伴って 8 日間の日程で出かけてきました。まず驚かされたのは 26 年前のスウェーデンでの視覚障がい者に対するケアが実にきめ細かくシステムとして確立されていたことでした。身近な体験もさることながら、高齢者のグループホームや知的障がい者のアソシエーションなどを訪問して多くのことを学ばされました。スウェーデンではこの後、施設から在宅でのケアに移行していったようですが、確実に日本はそれに遅れること 20 年になると思います。介護保険が施行して 16 年になりようやく高齢者に対するケアのシステムが整いつつあるとはいえスウェーデンに比べて圧倒的におくれを取っていると言えます。

NPO は政治（行政）の補完作用として働くことではありません。確かに行政の不足する部分を担うことに結果的にはなってしまいがちですが、誰もが安心して暮らせるより豊かな社会の実現のためにしっかりしたコンセプトを確立し目標を定めていくことが望まれていると思います。私ども「羽生の杜」はブレないしっかりした歩みで実現のために邁進します。

３、最後に

一つ残念な報告をしなければなりません。畑（農）を担当していた杉野輝君が 7 月末をもってここから離れました。彼が背負った課題を共に担いきれなかったことが原因の一つであったと心を痛めてお

ります。と同時にNPOという組織が抱える財源の脆弱さも問題の根底にはあったと思います。当初の作物作りを全面的に見直す状況です。当面、残念ながら畑については中断せざるを得ないと思っております。「羽生の杜」の全体像が見えてくる中であるいは畑を復活させる機会はあるものと確信してます。

事務局長　田村信征

子どもたちに森の遊び場・学び場を④

今年の夏休みも全6回の、『おいでよ！はにゅうの森』夏を開催しました。のべ79人の小学生と2人のお手伝いの中学生、13人の大人の協力者に恵まれた充実した会となりました。

今回の特徴は何といっても『きたよ！ゲスト先生』のコーナー。イベントやこみゅこみゅの来場者さんらに事務局長が声を掛けたところ、風船屋さんから始まり画家さん、パズル屋さん、音楽家さん、大工さんという多彩なゲストの皆さんが羽生の杜に集って下さいました。全員が快くお引き受け下さっただけでなくご友人を誘って下さる方もおり、地域の輪が広がってゆく楽しさを感じています。

これを機にゲスト先生の時間を日常の活動に展開してゆく企画も進められています。数少ない専従スタッフで出来ることは限られるので、多くの方に少しずつ力を分けていただけるかどうかが、今後の重要な鍵になっていくことでしょう。

ゲストの皆さんには無料奉仕でお越しいただきましたが、子どもたちと共に過ごす夏のひと時の豊かさが現状ではせめてもの恩返しです。森の竹で作っていただいた台で流しそうめんをするなど、ゲストの時間にとどまらない広がりも生まれました。講師の時間が終わった後は地域の一人として羽生の杜を楽しんでいただけるのです。

流しそうめん大会や焼きそば大会などゲストの皆さんにもご協力いただいた昼食ですが、スタッフも含めて20名超の食事を準備するのはなかなか大変なことです。そこで外部へのお弁当の発注を検討していた際に浮上したのが、地域でケバブを売っているお店への依頼です。我保流・阿富土留(ｶﾞﾌｫｰﾙ･ｱﾌﾞﾄﾞﾙ)さんがパキタン出身だったので、閉塞的な時世にこそ国際交流がよいのではないか、とケバブを推しました。

本当はお越しいただいて実演し食卓を共にしていただきたかったのですが、営業時間の問題、食品管理衛生の法的な問題、ガス器具の問題などにより断念、しかし子どもたちと車でお店に出かけることで交流をすることができました。今後さらに文化面で交流ができればと期待が膨らみます。

価格やドリンクのサービスだけでなく具の野菜の量や小学生の口に合う種類・味付けなど、細かな配慮に驚いたのですが、この春まで息子さんが子どもたちと同じ近くの小学校へ通っていたそうで納得しました。PameerBakery&nan の皆さん、シュークリアー！(ありがとう!) 。なお『お腹いっぱいケバブ･カンパ』にご協力いただいた吉田忍さんと理事長にこの場を借りて感謝申し上げます。

午後からの自然遊びの時間についてですが、今回は事務局長のお孫さんの田村勇眸(ｲｻﾑ)さんが展望台を作ってくれました。勇眸さんは中二だよと教えても子どもたちは信じてくれなかったのですが、大人びた風貌以上に展望台が中学生が作ったとは思えないほど素晴らしい出来栄えだったからでしょう。森を眺めながら昼食を食べたり、風に当たったりと羽生の杜に新しい目玉遊具が生まれました。

去年も報告しました魚・ザリガニ捕りですが、及川さんらに作っていただいた竹の釣り竿で大豊漁！亀やカエルも釣れました。カブトムシ捕りは子どもたちのほうが圧倒的に上手で、好きこそものの上手なれとはこのことだなぁとしみじみ感じます。

ほんの少し道筋を作るだけで子どもたちはどんどん進んでいくことができます。全部を大人が整えてしまうと遊びは豊かさを失います。何より、やらされている遊びほどつまらないものはありません。安全性とワクワク感という相反する条件の間で、楽しい自然遊びを一つずつ増やしてゆきたいものです。

さて、日常的な活動として”不登校”中の子どもたちとの『びば。』がスタートしました。反応はまだポツリポツリで、『2,3,4 と転がって』行くのはもう少し先になるでしょう。

そんな中でも今回特筆したいのは二階屋が使えるようになった点です。及川さんや丸山さんのお力を借りて立派なホームベースにリフォームできました。皆様から備品もたくさん送っていただき感謝の念が尽きません。一応の完成には至りましたが今後も『自分たちの居場所づくり』の活動としてコツコツ整美を楽しんでゆく予定です。『羽生の杜びば。』で検索いただくと Web ページで改装の様子がご覧いただけますので、詳しくはそちらをどうぞ。

びば。の二階屋は、この夏にはおいでよ！はにゅうの森の学習室としても使いました。デリケートな課題が付随しますが、少しずつ”不登校”の子と登校している子が区別なく利用できるような場にしたいと考えています。そこでお願いです。びば。は暑く長い羽生の夏をかろうじて扇風機でやり過ごしたような状態です。どうか子どもたちの健康のために**クーラー指定カンパにもご協力ください。よろしくお願いいたします！！**

スタッフ　**伊早坂 貴宏**

ご支援ありがとうございます

寄付･寄贈者･協力者 氏名、団体名
(2016 年 1 月 21 日～8 月 30 日に当 NPO 宛に寄付・寄贈をいただいた方。敬称略・順不同)

平野良子、ひばりが丘教会、西巻昭、井本克二、式町眞紀子、林間つきみ野教会、上村静、小畑太作、伊早坂政宏･久美、安田和人、吉井景子、番場友子、村田充子、高野光祥、菅原祐治･真美、移川早苗、小西弘泰、小林昭博、岩本慎三郎、堀江有里、関秀房・恵子、田中博明、町田恵子、福島真、山田真、山田美千子、坂田孝二、国安敬二、長尾由美子、二宮教会ガリラヤ会、飯田静代、石橋秀雄、新潟教会、東新潟教会、調満智子、川崎正明、板垣弘毅、島耕一、新喜昭、宮山博、富山三保、小田原緑、板津遥、村田充子、星山京子、菊池秋雄、雲然俊美、黛ただし、河口陽子、中野智志、羽生の森教会、洛陽教会、山口聡子、昆善起・百合子、原宝･直呼、越智靖之、横山潤、有浦陽子、吉田忍、大川大地、北村慈郎、久保田文貞、新城せつこ･けしば誠一、fad 合宿席上カンパ、宮崎詠子、
清水剛彦、桜田史子･丸山純、レザ･ゴルバニ、越谷教会、星山龍夫、塚越ちよえ、友野重雄、森ゆき、代々木上原教会、岡本碩祗、中村孝治、堀直樹、重冨すなお、東京･名古屋コスモ有志者、深川教会、及川勲、下見幸夫、丸定夫、藤塚貞夫、長谷川貞男、兼杉義之、木村光政、杉崎照夫、吉田美佳子、宇賀神寿一、小澤祥章、鍜治真起、金子めぐみ、Abdul Ghafool、林裕子、大谷元宏、匿名 1

「賛助会員になってください」

「羽生の杜」の運営は皆様の「賛助会費」とカンパによって支えられております。賛助会員確保は安定したご支援ですから計画的な予算組が可能です。事業の継続性を考えると賛助会員の拡大強化が喫緊の課題と思っております。昨年度はほぼ 200 万円（2015 年 4 月～2016 年 3 月）の支援がございました。その多くはカンパ（寄付）でした。昨年度は立ち上げ年ということもあり励ましの意味も含めて多くの方々がご支援をくださいました。今年度も引き続きお願い申し上げます。

NPO の活動はその働きの社会的価値がどのように評価されるかということ、同時にまた外部からのご支援はその活動（価値）に見合ったものとならざるを得ません。その意味で、わが「羽生の杜」は駆け出しの助走途中です。成果が可視化されているとは言えませんが活動報告にありますように確実に前進しつつあります。どうか未知への挑戦へご一緒にご参加ください。面白いことを実現しましょう。ご支援をよろしくお願い申し上げます。　(事務局長･田村)

郵便振替口座：00130-0-419749 特定非営利活動法人 羽生の杜

※賛助会員を募集しています
個人 一口 年/　５，０００円（何口でも可）
団体 一口 年/１０，０００円（何口でも可）

※コピー機、プロジェクター、スポーツ用品、楽器、リヤカー、などを求めています。中古品で構いませんのでよろしくお願いいたします。

正会員･賛助会員の方は**今年度ぶんの正会費･賛助会費**のご納入を何卒お願いいたします。その際は通常のご寄付と区別がつき易いよう、振り込み用紙の欄に☑をお書込み下さい。クーラーカンパなど用途のご希望がある際は、どうぞ一筆お書き添え下さい。

イベントの予定

11 月　子どもと教育に関する講演会
11 月　第二回クリスマス･リース作り講習会
12 月　第三回コンサート(クリスマス・ジャズライブ)
冬休　おいでよ！はにゅうの森(冬休み) ←アルバイト･スタッフさんを募集します。
順次　講演会　高齢者社会に向き合う　講師：星旦二さん(首都大学東京客員教授)

あとがき

ドイツ人の友人と羽生の活動について話をした時、「ドイツには不登校はいません」と言われて驚いた。なぜかというと、学校に行かないと警察が介入し、学校に登校させるというのだから、更に驚いた。ドイツと日本では「国民国家」形成の認識が、この国とは全く違う。要するに権利に関すること、国家権力＝警察に関すること、これらの認識がまるっきり違うのだろう。また、移民の子どもたちへの教育も徹底しているらしく、教育を平等に受ける権利を奪われることはあってはならないことを貫徹しようとしている。これがいいかどうかは、詳細を知らないところで判断は避けておく。もちろん、彼がドイツの子ども社会の全てを知っているわけではないので、当然、学校を拒む子どもたちもいるはずである。ただ、教育もまた、国家の掌握するところにあるという意味においては、常に暴力装置の一旦を担っているということも忘れてはならないだろうというくらいのことは言っておくべきだろうし、その意味で、大人側の「国民国家」意識の問題が常に子どもには纏わり付いている。

とは言え、子どもにとってはそんなことはどうでもいい話である。子どもたちがどう生きて、生き延びることが出来るのか、その手助けをするのが、せいぜいであろうと思うけれど、羽生の地で、それを試行錯誤してゆくことが始まっている。ひとりで苦しんでいるなら、ここに来て欲しい。ひとは、独りでは生きてゆけない。仲間になるとか、ならないとか、そんなことも関係ない。生きる道に茨がからみついているのなら、その茨を一緒に払いのけよう。そんな気持ちで、この場を作り続けてゆきたい。

理事長　星山 京子

特定非営利活動法人　羽生の杜

埼玉県羽生市桑崎 1331-2
Tel/Fax 048 538 4585
URL : www.hanyunomori.org